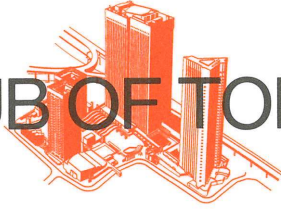




THE ROTARY CLUB OF TOKYO NEW-SOUTH



Weekly Report 東京新南ロータリークラブ週報

ROTARY: Sow the Seeds of Love

「ロータリー：慈愛の種を播きましょう」

2002～2003年度・国際ロータリーテーマ／ビチャイ・ラタクル会長

「ロータリーで喜びを！—参加しよう、友達になろう、クラブライフを楽しもう—」

2002～2003年度・東京新南ロータリークラブテーマ／吉田用親会長

【本日の例会】 8月23日 第759回例会

ブッフスタイル例会の為 卓話はありません。

【前回報告】 8月9日 第758回例会

◎出席委員会報告（清原委員長）

7月度の平均出席率は78.75%でした。

80%以上にしたいので、皆様のご協力をお願い申し上げます。メーク・アップの活用をお願い致します。

◎慶事披露

誕生日祝／ジョン・チャヌ君（8月11日）

谷村義雄君（8月13日）

◎出席報告

会員66名／出席38名・欠席28名（出席規定免除者6名）

ビジター1名、ゲスト3名（米山奨学生・党偉榮さん）



8月9日／11件 30,100円

2002～2003年度累計 216,500円

多額の御寄付を有難うございました。

土屋東一／本日の講師、長倉さんです。よろしくお願ひします。谷村義雄／八十歳を迎えました。今後ともよろしくお願ひいたします。ジョン・チャヌ／バースデーを祝っていただき有難うございます。小湊雅亮／お暑うございます。皆様お大事に。柴田陽三／お暑うございます。荒木昭文／藤後さんのニコニコ関所につかまりました。四分一勝／藤後さん初ニコニコご苦勞様です。清原元輔／夏休みで、一時帰国していた長女がUSAに戻りました。家の中が静かになった分、寂しくなりました。藤後さんニコニコご苦勞様です。河原勢自／藤後さんが初めてのニコニコのようです。顔が写りきつておりますね。山川政樹／立秋が過ぎたのに暑いすネ。藤後幸生／毎日、お暑うございます。家族が久しぶりに日本に帰って参りました。妻の手術も無事に終わり嬉しい気持ちでニコニコです。

【次週予告】 8月30日 第760回例会

◎卓話予定

「古地図を読み解き、都市の“いま”を知る」

江戸東京博物館 学芸員

鈴木章生氏

8月 火曜会 報告

本年度第2回目の火曜会は「クラブの魅力を語ろう」というテーマのもとに青野さんの司会で始められた。パネリストの武下さんは、創立時からの現在まで入会会員数に対する残存者数をクラブの魅力を表す指標としてとらえ、各年度毎の状況を紹介された後、同じ価値観を持った人の集まりだから会うのが楽しみで、出席することが奉仕に繋がると語られた。次に石井さんは、当初は2年で退会するつもりで入会したが、例会での卓話が楽しくなり、さらに新人、中堅、古参の皆さんと親睦を通じて融和をはかりたいと考えるようになった、と述べられた。二人のパネリストの話の後、司会者の指名で、火曜会の大御所河原さん、岸さん、ジョンさん、16年無欠席の四分一さん、渡邊さんがそれぞれの見地から貴重なご意見を語られた。最後に青野さんが、今年の夏は暑いので「うちわ」が必要だが、火曜会は「内輪」の関係になることが重要だ、と落として閉会した。（荻野 記）

出席者19名（順不同、敬称略）福島、青野、武下、石井、吉田（用）、吉岡、大日方、関、四分一、村山、渡邊、ジョン、西澤、小杉（眞）、高須、岸、河原、新保、荻野

元米山奨学生・李承福さんからの便り

東大で博士号取得中の李承福さんから現状報告のメールが届きました（圓谷）。

「現在の状況ですが、今年2月に先生に呼ばれて、これまでの実験のデータと結果をまとめて12月頃博士論文審査を受けることができるようにと言われました。その準備の一環として去る6月に日本機械学会に論文を1件、7月にICMTという国際会議にも1件投稿しました。10月に九州で開催されるICMTでは発表も行う予定です。今は、日本機械学会に2件目の論文を書いている所です。また、それと別に11月の機械学会の生産・加工分野の部門会にも講演論文を申し込んでその実験も並行してやっている所です。普通、修士の場合は研究の結果が1件あれば卒業で、博士はその3倍くらいの3件あれば卒業なのですが、私の所属するの研究室では5件が要求されているので、時間がかかります。結局、3件はできており、あと2件についてはネタがあつて9月、10月にかけて実験してまとめる予定です。それらが揃いましたら12月頃に審査を受け、来年2月までに博士論文を提出し、3月に卒業の流れです。このような流れをいつも頭に描きながら論文を書いています。

圓谷様を始めとする新南RCの皆様には大変ご心配をお掛けしておりますが、皆様のご期待を裏切らないようがんばりますので、宜しくお願ひ致します。」

知的障害者の新聞「ステージ」・
新聞記者の「罪滅ぼし」毎日新聞社 生活家庭部副部長
長 倉 正 知 氏

私は、毎日新聞の生活面を担当する生活家庭部のデスクをしています。

5年前から、「全日本手をつなぐ育成会」が発行する知的障害者向けの新聞「ステージ」作りを手伝っています。

私は障害者問題の専門家ではありません。でも、知的障害のある子供がいる後輩記者から「いかにも障害者向けという新聞にはしたくない」という条件で新聞作りを頼まれました。ちょうど会社の仕事に不満を感じていた時で何か会社以外の世界で役立つことをしたいと思っていたし、また我が身を振り返れば、日ごろ偉そうなことを書いていてもろくなことはしていないし、ここは一つ「罪滅ぼし」と引き受けました。

実際の新聞作りに詳しい同僚に手伝ってもらい、深夜の新聞作りが始まりました。なぜ深夜かというと、今は許可を得ていますが、そのころは新聞作りは会社には内緒だったからです。普通の新聞が出来上がった時間に、会社のコンピューターで新聞を組み上げました。

この新聞を作ってくれた同僚や、記事をリライトしてくれた後輩たちも、すべてボランティア。原稿料は「そのうち、酒でもおごるから」だけ。お互い薄給は承知なので、請求してくる奴もいないので助かっていますが、手伝ってくれてる人の中には、社説を書いている論説委員もいますし、超多忙の花形記者もいます。こうして3カ月に1回発行で、現在22号を出しています。

「ステージ」は、普通の新聞と違うユニークな工程があります。「読み合わせ」というもので、知的障害のある編集委員に、記者が書いた原稿を読んでもらうのです。そうすると「これは何を言いたいのか分かりません」「どういう意味かもっと分かりやすく書いて」とか遠慮のない意見が出ます。記者たちもできるだけ簡単な記事を書こうと努力してくれますが、それでも普段の記事の書き方が随所に出てしまいます。それが「分かりにくい」のです。読み合わせの意見をもとにまた記事を書き直しています。

毎日新聞も、その他の多くの新聞も、新聞離れを恐れ「分かりやすい新聞」を標榜しています。でもそれは簡単にはいきません。でも、私は、「ステージ」の経験が、必ず記者に分かりやすい記事というものについて考えるきっかけになると思っています。だからできるだけ多くの若い記者たちに「タダ働き」をさせようと誘っているのです。

「ステージ」作りは、私たちが一方的に「与える」善意ではありません。私たちも障害者からもらっているものも多いのです。それが私が今もステージ作りにかかわっている理由です。

シンクタンク
辛苦嘆句余滴

ヤマドリのけたたましいなき声と「ズドン」となる鉄砲の鈍い音を朝のまどろみの中に聞く。朝市でこのトリと共に売られるリエーブルと呼ばれる野ウサギが吊されている光景がうかび「野ウサギのシベ」と呼ばれる赤ワイン煮込みの野生あふれる味は忘れがたい等々の連想がうかぶ。

時は88年、晩秋のボルドー。大西洋に注ぐジロンド川右岸にあるCotes de BlayeにあるChateau de Dubraudの一室である。

このシャトウは1889年、マダム・デュブローによつてはじめられ、ブライ地区の赤ワインでも最も味わい深く品位があり、87年にはAOCの格付けをえた。

すると突然、ドアの外で“ポトリ”とモノを置く音がする。堅く長い例のバケットパンをマダムがドア脇に立てかける音である。朝食はこのパンを持って勝手に食べるのがこの仕来り。

当時、英国と会社をやっており頻繁に英国と行き来した関係で、英国人所有のこのシャトウを度々訪れた。(ボルドーは12～15世紀イギリス領となったこともあり、英国と関係が深い) シャトウの名前がドブクロに似ていて7万坪のvineyardから年間17万本の赤ワインを生み出すプール付きのシャトウ。そしてすばらしい田園風景と人情に惚れ込み経営に参加することになった。

話の本題は、日本人向にこのシャトウの利用権と収穫された赤ワインを小口化して売捌き一攫千金を得ようというプロジェクトの失敗談である。

この企画をSデパートに持ち込んだところ大乗り気で、短期間で完売間違いなしとのこと。

早速ボトルのラベルデザインをグラフィックデザイナーの田中一光氏(おしくも今年早々逝去)に相談、麴谷宏氏(デザイナー、有名なワインコレクター)を紹介して頂き制作を依頼。

ほどなく立派なラベルも出来、準備万端整い、いざ売出という直前パリに長年駐在の同デパート顧問のT夫人より本計画ストップされたしの報。

その最大の理由は、「ワインはアセット・リキッド(液体流動資産)」という経済用語を生んだくらい利益を上げることもあるが、何よりも、シャトウとワインは混然一体となったフランス文化の中枢を形成し、真に文化そのものである。これを切りキザンで売るとは何事か。日仏の文化摩擦必然である。」

また、折あしく日本男性がフランス女性を切りキザムという猟奇事件も起こった。

かくて千金の夢は破れかの国の諺、La vérité est dans le vin.(真理はワインの中にある。)をかみしめる結果となった。バブル時代のお粗末な一席でした。